# 幼児の経験領域とその指導

Teacher's Guide To Education In Early Childhood
Compiled by the Bureau of Elementary Education,
State Department of Education California
State Department of Education, Sacramento, 1956

前回にひきつづいて、子どもたちにどのようにして教育的な経験を用意するかという問題をとりあげよう。ここに述べるのは、幼稚園では、年長組、および小学校の一年生、二年生の低学年をふくんでいるから、幼稚園にしてはやや年令の高いものを念頭においていることを注意していただきたい。

**＜経験の順序＞**

子どもたちに、ある教育的な経験をさせていくのには、その順序を考えなければならない。教師は子どもたちの興味をつなぎとめ、やりがいがあると感じさせ、しかもやることができそうだと思わせるように考えてゆかねばならない。そしてそこでとり上げようと思っている主題の経験をさらに分析して考えておくことも必要である。さらに、そのようなひとつひとつの経験が自然にむすび合わさって次の段階へと進んでゆくように、あらかじめ予想を立てておくことも必要である。もちろん、子どもたちの経験の背景を教師がよく知らない場合には、この予想は計画通りにはすすまないであろう。しかし計画することによって、教師は、子どもたちが進んで活動するように準備することができるのである。実際に経験が進行してゆくときには、子どもたちがしたり言ったりすることが重要になるのである。

**・経験の順序の例**

ここに挙げられている例は7才児の例であるので、幼稚園児にそのままにあてはまらないだろうが、十分に参考になると思うので、次に述べておこう。

**経験の発端**

この前の学期に子どもたちは農場を主題とし、牛の乳からいろいろのものができることを知った。そしてミルクをどのようにして運搬するのかに興味をもっていた。そこで教師は汽車のことを新しい単元としてとり上げることにした。

教室は次のようにととのえられた。後の

壁には二枚の汽車のポスターを貼り、わきの壁には機関車が貨車をひいて煙を出している絵をはった。後部の床には模型の汽車をおき、つみきと人形とをおいた。壁際の床には、イーズルを二つおいて、それには紙をはって、いつでも画けるように準備した。前面の壁には、エンジンとミルクのかんをのせた貨車の絵を貼った。

壁際の棚には、機関車、旅客、貨車などの絵本やおはなしの本を並べた。

子どもたちをまわりに集めて、先生は次のように言った。「今日は部屋の中に新しいものがいろいろあるでしょう。きっと、見てまわって、何がおもしろかったかお話してくれる人があるでしょうね。」五人の子どもが手をあげて、見てまわることを許された。その子どもたちが一通り見てまわった後に、教師は何がいちばんおもしろかったかを尋ねる。ある子どもは、汽車がおもしろかった、ひとつ作ってもよいかとたずねる。ある子どもは、壁に貼ってある絵がきれいだったという。その他、いろいろの話しが出た。

**経験を分ちあうこと**

話し合いの後は、子どもたちは、それぞれ、画いたり、本をよんだり、木で作ったり、つみきをつくったりすることをすすめられる。そして、それぞれいろいろの活動に従事する。そして、そのあとでまた自分たちの経験したことを話しあう。そこでたくさんの子どもたちが貨車を作りたいという希望を述べた。このことから、次のような一連の活動や経験が発展した。

どのような汽車を作るかをきめること。

貨車を見学にゆくこと。

汽車を作るのに木材の大きさをきめること。

異った型の汽車を作ること。

汽車の絵をみて、話し合うこと。

汽車に関する映画を見ること。

汽車の歌をうたうこと。

汽車の絵を画くこと。

汽車の動きにもとづいたリズム活動をすること。

このような活動を経た後に、また話し合いの時間をもった。その結果、子どもたちは汽車のはいる車庫が必要だということをきめた。そのことから、次のような経験が発展した。

汽車はどのように車庫を使うかをみる。

車庫の絵をみること。

汽車についての話をよむこと。

汽車の時間表をみること。

車庫を見学すること。

汽車と車庫の絵をかくこと。

車庫の中の回転台――に合わせてリズム活動をすること。

車庫をつくること。

車庫を使っているうちに、子どもたちは線路がないことに気づいた。そのことから、次のような活動が発展した。

線路の大きさをきめること。

終点をきめること。

床の上に線路をかくこと。
線路の上に汽車を走らせるうちに、子どもたちは衝突を避ける必要を感じた。そして切り換えや信号器の必要から次のようなことが発展した。
異った種類の信号や切換え装置について読むこと。
切り換え装置をつくること。
信号の動きに従ってリズム活動をすること。
信号の絵をかくこと。
信号をどこにおくかを学ぶこと。
信号をどのようにして操作するかを学ぶこと。
何故異った種類の信号があるのかを学ぶこと。
汽車ごっこ遊びをしている間に、子どもたちは信号を操作する人の必要を感じた。そして運転手、車掌、信号手などの必要から、次のような経験が発展した。
汽車の中や線路の上で働く人たちの仕事を列挙すること。
先生が鉄道従業員についての本をよんでくれるのをきくこと。
そのような人たちの働いている絵をみること。
人形に鉄道従業員の服装をさせること。
いろいろの鉄道従業員のリズム活動をすること。
鉄道用語を知ること。
このような経験から、貨車の荷物を積んだりおろしたりする必要が生じ、次のような経験へと発展した。
貨物倉庫のことを本でみること。
貨物倉庫を見学すること。
貨物倉庫を作る計画をすること。
貨物倉庫を作ること。
汽車から荷物をおろすのに貨物倉庫を作ること。
そこで、材木や家畜や、穀類や果物、野菜、肉などをどこで荷物をおろすかという疑問が生じた。こうして、貨物のおろされるそばに、家畜をいれるところ、製粉所、材木置場、石油タンク、卸売市場などの必要を感じ、そのことから次のような経験が発展した。
いろいろの貯蔵所を計画すること。
つみきでそれをつくること。
地図をみて、どこにどのようなものができるかをみること。
材木置場、製粉所、その他の貯蔵所を見学すること。
いろいろの産業についての書物をよむこと。
いろいろの荷物をどのようにして積んだりおろしたりするのかを知ること。
貨物を運ぶ活動のリズムをすること。
貨物がいろいろのものを運ぶ絵をかくこと。
このような活動から、子どもたちは、いろいろの種類の荷物を適当に分類してそれぞれの貯蔵所に送る必要を感じ、そのことから次のような経験が発展した。

分類しわけ場について、先生が用意した材料をよむこと。
分類場の絵をみること。
先生が分類場の略図を黒板にかくのを助けること。
分類場のリズム表現をすること。
分類場の貨車の絵をかくこと。
このような活動をする内に、子どもたちは製粉所の小麦をどこからもってくるのかに興味をもち、次のような活動が発展した。
小麦のとれる地方を地図で見出すこと。
小麦について本でよむこと。
どのようにして小麦を栽培するかを知ること。
小麦の収穫のリズム活動をすること。
どのようにして小麦が農場から運び出されるかを知ること。
小麦粉をつくる過程を知ること。
異った種類の小麦粉を見ること。
パンを焼く過程を知ること。
パン屋を見学すること。
パンを焼いてみること。
パンの製造について、お話しをつくり、絵をかき、歌をうたったりすること。

**経験領域と教科**

子どもがある経験をするとき、その経験の中にはいろいろの教科的要素がふくまれている。地理、歴史、算数、国語、音楽などがばらばらに教えられるのではなく、相互に関連をもって一つの経験になっている。小学校の低学年の段階でもこのようなことが言いうるし、幼稚園の段階ではなおさらである。たとえば つみきで家をつくり、人形に洋服を作り、おうちごっこをして遊ぶあそびのなかで、子どもは数を学ぶし、また国語をも学ぶのである。子どもたちがしている経験を分析すれば、どのような教科的な要素がふくまれているかということを教師は知っておくことも必要である。前に述べてきたいろいろの経験を分析してみると、次に掲げるような内容を見出すことができるであろう。

(1) 身体的協応運動の発達

a 筋肉の協応は大きな身体の動きを通して養われる。たとえば、リズム、ごっこ遊び、木工など。

b 目と手の協応は製作を通してなされる。

c 自由に動きまわることによって、神経の緊張から解放される。

(2) 知的発達

a 知的な概念は見学など直接経験を通して養われる。それから、絵をみたり、お話をきいたり読んだり、作ったりすることによって養われる。

b 製作やごっこ遊びの中での問題解決は注意深い思考や計画性を養う。

c 子どもは新しい経験をすることによって、新しい興味が出てくる。

d 経験を増すことによって、意味のある語彙がふえてゆく。

(3) 社会的発達

a 民主的に生活する経験を通して、グ

ループの中で責任ある行動をとることを学ぶ。それによって、集団生活ではどのような行動がたいせつかを学ぶ。

b　民主的な社会生活を通して、学校、地域社会、人間同志の関係についての基本的概念を養うことができる。

(4)　情緒の統制

a　それぞれの年令にふさわしい経験をすることによって、緊張や抵抗なく問題にぶつかることができる。

b　年令にふさわしい経験をすることにより、自分の力の限界を知り、合理的に問題を解決することができる。

**〈ひとつの経験の終結をどのようにするか〉**

ひとつの経験はどのくらいの期間、あるいはどのくらいの時間、つづけるべきなのだろうか。この答えは子どもの発達の程度によって相異する。発達がすすむにつれて、だんだんに長時間、長期間つづくようになる。たとえば、船という経験をとってみても、幼児の初期ではたんにホートをいじくるだけである。その興味は短かくて淡い。もっと発達がすすむと、船を造り、港の模型をつくる。またそれをごっこ遊びにまで発展させる。理解のある教師は、まだ子どもたちの興味が消えないうちに、その経験を終結に導いて、次の経験にうつる準備をする。子どもが飽きるまでつづけるのもよくない。適当によび起こされた興味は、これから一生の間つづくこともある。

ひとつの経験を終るに当っては、どのようにして終るかということを子どもと共に計画するとよい。自分たちの得た経験を互いに分ち合うのもよいし、特別な活動を計画して両親や友だちを招くのもよい。それは両親が現代の教育を理解するのにも役立つであろう。両親を招くためにどのようなことを計画するかを子どもたちとともに考えることは、子どもたちに両親の興味を考えさせるよい機会となる。

以上に示すように、子どもたちの経験は、その発達状態にふさわしく、子どもの生活に適した形でなされることが教育的であり、また能率的でもある。子どものごっこ遊びではこのような観点から重視されねばならない。そして幼年期においては、実際の教育の展開は、ごっこ遊びの形でなされることが多い。そこで次に、ごっこ遊びを扱っているこの書物の第八章の概略を紹介する。

第八章、子どもが周囲の世界と一つになるのを助けるために。

ジョン・デューイーは遊びの価値を強調し遊びは幼児期にもっとも重要な、そしてほとんど唯一の教育形態であると言っている。子どもをとり囲んでいる物の世界は、たんなるものではなく、自然界であり、社会生活であり、子どもにとって意味をもった世界である。そして、ごっこ遊びはたんに幼児の一般的特性を示すだけではなくて、その子どもが学習をしてゆく場なのである。このことを認識するときに、現代の

学校はカリキュラムをこの子どもの特性に適するように考えねばならない。子どもは直接経験をし、またごっこ遊びという代用経験をしながら、知識を求める要求や、技能を用いる要求が増大してゆくのである。この要求をみたしている間に、また新しい要求が生み出される。こうして教育過程は次から次へと鎖のようにつながってゆく。その過程は前章に示された通りである。

そこで教師のつとめは、子どもに要求を起こさせ、その要求をみたすように指導することである。そして幼児期には、ごっこ遊びに従事している間に新しい要求が生まれる。

**〈ごっこ遊びの教育的価値〉**

ごっこ遊びが教育的に重要である理由を次に要約して示してみよう。

(1) ごっこ遊びはもっとも自然な形の学習方法であり、したがってもっとも容易な学習の方法である。

たとえば、自分たちのつくった鉄道の終点の貨物を分類するために、7才児は貨物の取扱いの複雑な機構に興味をもち、彼らはそれをごっこ遊びの中にもちこむのである。遊ぶために、調べ、発見し、つくることは子どもにとって大きな喜びである。

(2) ごっこ遊びは力動的な相互に関連のある学習場面を提供する。そしてそこから自然に次の活動への衝動が生まれる。

港で見たような船をつくると、それを使って遊ぶ。それで遊んでいるうちに港が必要になってくる。それをつくるには、相当の時間と努力が必要である。でき上ると、子どもは港の船で遊ぶ。それで遊ぶうちに港の付属物が必要になり、桟橋やドック、倉庫などをつくる。こうして次々に要求が生れてくる。そしてついには、貨物で遊ぶうちに、地図を必要とし、どこでどのような産物がとれるとかいうことを知る必要も生じてくる。このような仕事と遊びの一連の活動から、彼らの知識は拡大してゆく。

(3) ごっこ遊びは民主的な社会の経験を与える。

港で遊んでいる間に、グループの中でそれぞれの子どもは自分の仕事を選び、それを通してみんなの活動に貢献することを知る。それぞれが船長や水夫になって役をとり、お互いに協力することを知る。それぞれが順番を待ち、協力して問題解決をすることを学ぶ。

(4) ごっこ遊びによって、教師は子どもたちの誤まった認識を知ることができる。

たとえば、船を浮かべて動かすのは、後向きに動かしているならば、どうやればよく動くのかを知らせることができる。

(5) ごっこ遊びによって、教師は反社会的な態度や行動を観察し、社会的葛藤をとり除くのを助けることができる。

たとえばおうちごっこをしているそばで、一人の子どもがつまらなそうに立ってみんなをみている。どうしたのかたずねてみると、他の子がいれてくれないという。遊んでいる子にたずねると、あの子の家の

自動車は古い自動車なのだという。他の子はみんな新しい自動車をもっているから、古い自動車をもっている子はいれてやらないのだという。これは反民主的な態度であって、ここに子どもたちの誤まった考え方を訂正する機会がある。

(6) ごっこ遊びによって、教師は情緒的葛藤を発見し、家庭や近隣社会の中の望ましくない条件を発見することができる。

たとえばある子どもはおうちごっこの中で、人形をはげしく叩くのである。それをきっかけにして調べてみると、家庭でも体罰をうけていることがわかった。そして両親がもっと適切な扱いをする必要が分ったのである。

(7) ごっこ遊びによって、子どもは、現代のおとなの当面している社会的問題に気づくことができる。

たとえば、港の遊びをしているときに、港には検閲官がいることがわかった。数人の子どもが検閲官になりたがったが、遊びがすすむうちに、検閲官がある友だちにえこひいきをすることがあらわれた。そして遊びは崩壊してしまった。そこで教師はみんなを集めてその問題について話をし、友だちをえこひいきすることはよくないことを話した。このことを通して、政府の検閲官は公正に人を扱わねばならぬことを知ったのである。

(8) しばしば、ごっこ遊びは治療価値をもつ。

ごっこ遊びの中で、子どもは自分自身を発揮し、自分の行動を組織立ててゆくことができる。情緒的に不安定な子どもも、ごっこ遊びにうまくはいりこむことによって、正常な行動のしかたを学んでゆくのである。

以上に述べたように子どもの学習はごっこ遊びの中で行なわれることが自然である。そのごっこ遊びを活用し、その内容を豊かにしてゆくところに幼児教育の大きな課題がある。

（津守）


**幼児の教育** 第六十二巻 第十号

十月号 © 定価六〇円

昭和三十八年九月二十五日 印刷
昭和三十八年十月 一 日 発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。